

# 三浦丘陵における山野利用の変遷

— 葉山町木古庭地区を中心にして —

武田周一郎・岩田明日香・山石 勉

## I はじめに

首都圏に位置する三浦半島には、都市化の著しい現代に至ってもなお、広く緑地が分布している。横須賀を抱え、横浜や東京とも近接性を有する三浦半島は、首都圏の緑地として重要な意味をもっている。

首都圏の緑地に関する研究は、武蔵野台地を中心とした関東平野の平地林<sup>1)</sup>について多くの蓄積があるものの、三浦半島に関するものは少ない。従来の研究では、近世の三浦半島における山林資源の生産と流通<sup>2)</sup>や、明治期以降の三浦半島南部における植生の変遷<sup>3)</sup>が明らかにされている。横浜や横須賀といった近代に急激な成長を遂げた都市との関係を考慮すれば、山林資源生産の中心であった半島北部の丘陵地を対象として、近世から近代にかけての山野利用の変遷を通時的に検討する必要がある。

首都圏に限らず山野利用の変遷を明らかにした研究は数多く、先駆的なものとして千葉徳爾<sup>4)</sup>による「はげ山」の研究が挙げられる。千葉は「はげ山」の形成過程を明らかにするなかで、草地から裸地さらに森林へという植生の変遷を示したが、その後も同様の研究は多く行われている。また近年、小林 茂ら<sup>5)</sup>は太宰府市域における森林の変化を明らかにした上で、高度経済成長期を検討の始点とすることが多い里山保全論に疑問を呈している。

本稿では上述のような研究を踏まえ、三浦丘陵における山野利用が、近世から近代にかけていかに変遷したのかを、通時的に明らかにすることを目的とする。特に三浦丘陵を首都圏の重要な緑地として位置づけ、都市との関係を考慮しながら検

討する。

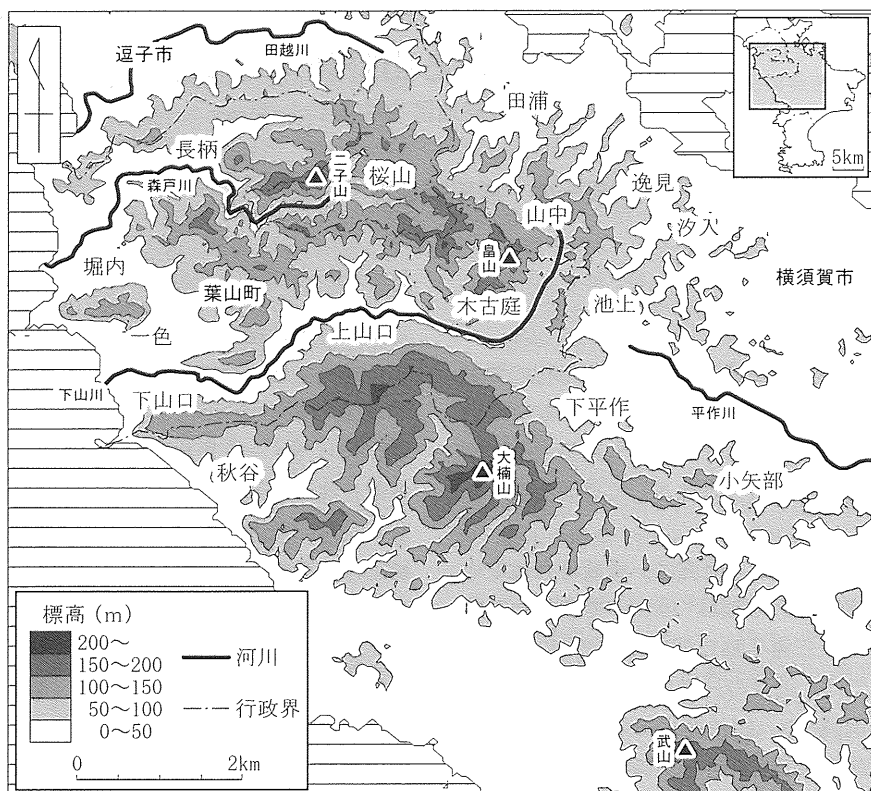
研究対象地域は、北部の丘陵と南部の台地地域から構成される三浦半島のうち、北部の丘陵一帯である(第1図)。三浦半島の北部には大楠山(標高241.8メートル)などを中心とする丘陵地が多摩丘陵から連なり、南部には複数の段丘群からなる台地が発達している。このうち北部の丘陵の植生は、面積の大半がコナラを中心とする二次林によって占められている。そのほか、一部にスギ・ヒノキ植林が広がり、またスダジイやタブノキなどの自然林が点在している(第2図)。

対象地域には逗子市、三浦郡葉山町、横須賀市の一部を含むが、とくに葉山町木古庭地区を中心にして検討する。研究方法としては、まず検地帳や村絵図をもとに、近世前期から後期における草地の分布と利用を検討する。続いて地籍図や地方文書および葉山町役場文書をもとに、明治期の山野利用について検討する。なお葉山町域では、近年、葉山郷土史研究会<sup>6)</sup>が一次史料の収集をともなう調査成果をあげている。本稿ではこれらの成果を踏まえ、木古庭地区を中心として、周辺村落の事例を含めて分析する。

## II 近世前期から後期における草地の分布と利用

### 1) 元禄期における草地の分布

木古庭村を含む三浦郡内の前橋藩領で、元禄12年(1699)に総検地が実施された<sup>7)</sup>。この検地で注目されるのは、耕地や屋敷とともに山野領域が縄入れの対象とされた点である。検地が実施された村落では、耕地や屋敷を帳付けした検地帳だけでなく、山野領域のみを書き上げた「山検地帳」が作成された<sup>8)</sup>。この山検地帳は、耕地を記載し



第1図 研究対象地域



第2図 対象地域の植生図  
(『神奈川県史 各論編4』付録植生図により作成)

た検地帳とは別立てとなっている。そして山検地帳には山や林が1筆ごとに書き上げられており、1筆ごとに名請人が記載されている。1筆ごとの記載様式は、以下の通りである<sup>9)</sup>。

蔵谷

一 三拾間・貳拾九間 上萱山 貳反九畝歩 善右衛門

同所

一 三拾間・拾三間 中萱山 壹反三畝歩 同人

この山検地帳には多様な地目が書き上げられているが、その地目は村ごとに異なっている(第1表)。木古庭村・上山口村及び一色村では、山が上・中・下・下々の4等級に区分されている。一方で桜山村・長柄村及び堀内村では、地目がより細かく分類されており、山(松山・雑木山・萱山・

第1表 相模国三浦郡前橋藩領における村別の山・林・藪・芦野面積－元禄12年（1699）－

(単位：畝・歩)

地目		木古庭村	一色村	上山口村	桜山村	長柄村	堀内村
山	上	3140.09	370.25	460.00	—	—	—
	中	1682.14	417.08	1101.00	—	—	—
	下	1792.24	365.24	1364.21	—	—	—
	下々	—	1484.18	1130.10	—	—	—
松山	中	—	—	—	197.24	894.20	138.16
	下	—	—	—	522.19	1285.20	347.05
	下々	—	—	—	20.15	419.00	126.29
雑木山	中	—	—	—	39.28	79.00	—
	下	—	—	—	21.15	52.00	—
萱山	上	—	—	—	62.19	1097.11	—
	中	—	—	—	218.01	753.10	561.21
	下	—	—	—	48.03	845.20	679.22
	下々	—	—	—	4.24	146.26	47.04
芝山	下々	—	—	—	179.00	1335.20	512.23
林	下々	—	—	—	—	—	0.10
松林	下	—	—	—	2.28	—	8.15
	下々	—	—	—	5.10	—	2.20
雑木林	下々	—	—	—	—	—	2.10
藪	竹下	—	—	—	10.20	—	—
	竹下々	—	—	—	20.15	—	—
	篠下々	—	—	—	6.12	—	—
芦野		—	—	—	12.24	—	—
村中持	秣場	—	—	—	—	2491.00	—
	散在野	—	—	514.00	—	—	—
御林	松	—	150.00	—	—	—	—
	雑木	—	—	175.00	—	—	—
	竹	—	—	316.00	—	—	—

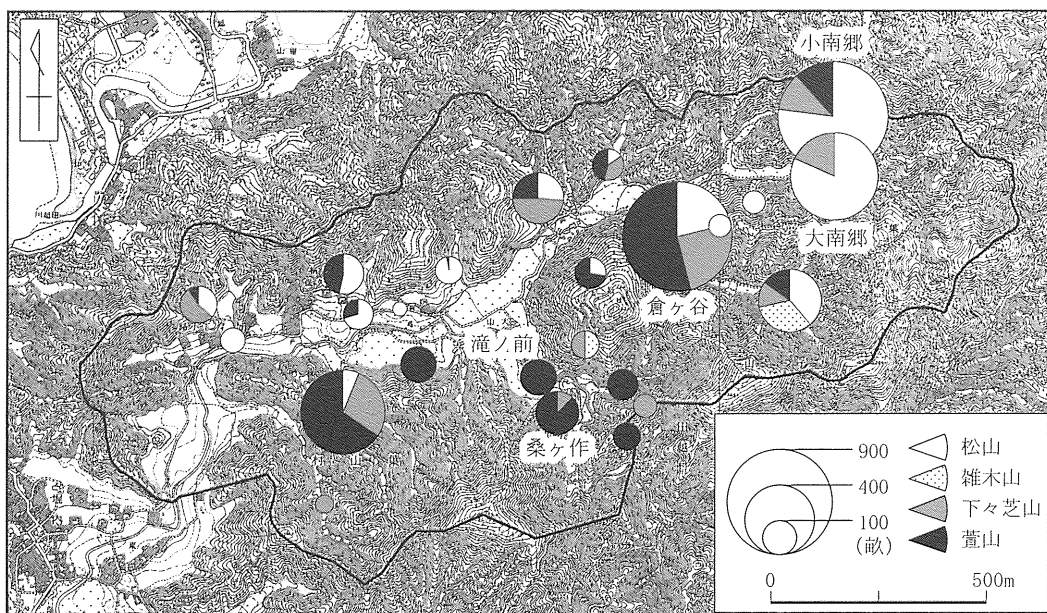
(葉山町役場文書・葉山家文書・『逗子市誌』の各村検地帳により作成)

芝山)、林(松林・雑木林)、藪が、それぞれ上・中・下・下々の4等級に区分されている。また桜山村では、この他にも芦原が帳付けされている。これらは個人所有の「百姓持山」であるが、さらに村共有の秣場や散在野、そして御林が帳末に記載されている。山検地帳に帳付けされた山野は村高には結ばれておらず、小物成として1反あたり25文程度の「山銭」が課せられていた。このうち特に注目されるのは、山検地帳に帳付けされた山野面積のうち、萱山及び芝山が占める割合である。桜山村及び長柄村では帳付けされた山野面積のうち約4割、堀内村にいたっては約7割強が萱山及び芝山で占められている。

さらに村ごとに詳細に検討すると、地目の割合

に偏差があることがわかる。例えば長柄村では、村内を流れる森戸川の最上流部にあたり、集落から離れた小南郷・大南郷に合わせて15.5町の「山」が帳付けされており、このうち約8割の12町が松山である<sup>10)</sup>(第3図)。一方で森戸川上流部の倉ヶ谷では9.5町の山が帳付けされているが、このうち約8割の7.5町が芝山及び萱山である。また面積は少ないものの、大山付近の桑ヶ作や滝ノ前などでは、全てが萱山もしくは芝山である。

同様の偏差は堀内村や桜山村でも確認され、元禄期の三浦丘陵には数町規模の萱山や芝山が、まとまって分布していたことが指摘できる。萱山や芝山の実態は不明であるが、松山や雑木林とは区別されていたことから、樹木が生えていない草山



第3図 長柄村における松山・雑木山・芝山・萱山の分布－元禄12年（1699）－  
 （葉山町役場文書「相模国御浦郡長柄村萱山芝山山秣場御検地帳」、明治36年  
 （1903）1万分1地形図「逗子」・「長浦」により作成）  
 注）実線は明治期の大字界を示し、大字界および地名は鶴（2007）を参照した。

であったと判断されよう。

## 2) 絵図にみる山上の草地

近世後期の三浦丘陵における村落景観を描いた典型的な事例として注目されるのが、下山口村絵図である。下山口村は相模湾に面し、下山川河口に位置する村落である。村域は、相模湾に面した西方を除く三方を丘陵に囲まれ、村内を西流する下山川沿いに耕地と集落が分布していた。また沿岸部には三崎往還が通り、街道沿いには商店が分布していた<sup>11)</sup>。

この下山口村には複数の村絵図が残されているが、これらの絵図で目をひく大きな特徴は、丘陵山頂部の描写である。特に顕著なものが嘉永5年（1852）の絵図<sup>12)</sup>である。村落の三方を囲む山並みの上半分が、一際目立つ橙色を用いて「秣場」として示されている（第4図）。また慶応4年（1868）以降の作成と思われる絵図でも、やはり南斜面の山頂部に「茅山」という文字が認められ

る。

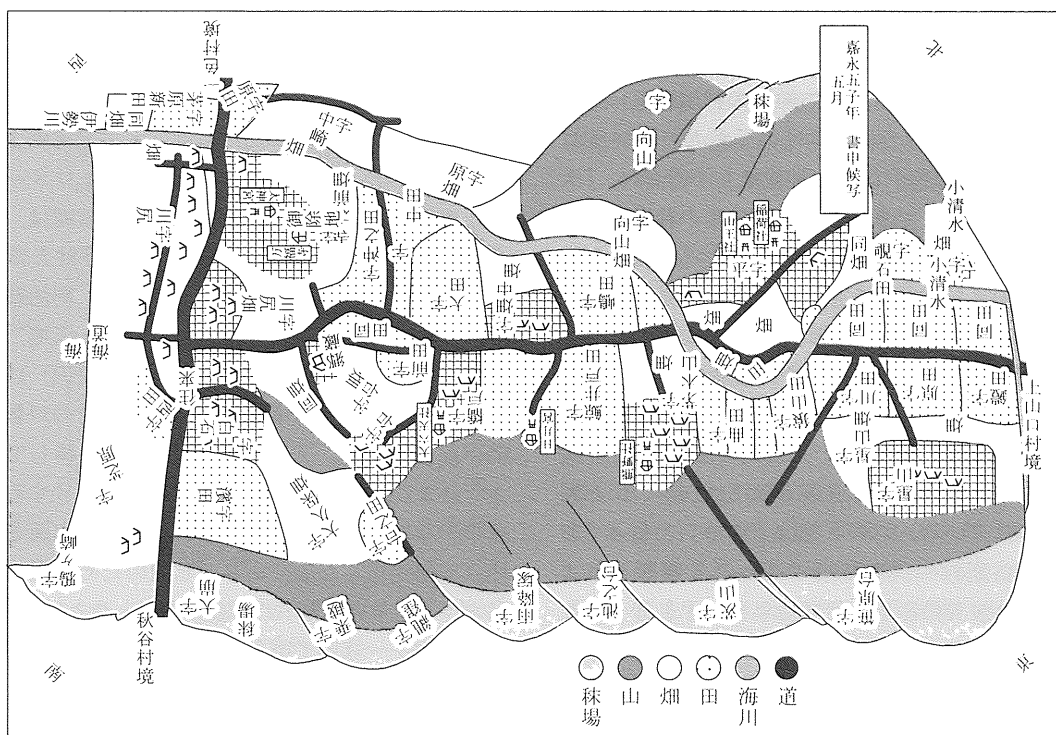
同様の状況は他村にも認められる。例えば天保期成立の『新編相模国風土記稿』<sup>13)</sup>によれば、木古庭村北部の「小名島山」には「山城」があり、「八町許」登ると「山上芝地」であった。この島山は木古庭村と田浦村との境に位置しているが、天保期にはこの木古庭村島山の「山上」が「芝地」であったということになる。

下山口村絵図に描かれた描写は、近世後期の三浦丘陵においてある程度一般的であったものと推察される。少なくとも現在のように、丘陵全体が樹木に被覆されてはならず、山頂部を中心にして広く草地が分布していたと判断される。

## 3) 秣場争論と山野の利用

### a. 桜山村と上山口村

木古庭村の北部に位置し、周辺を丘陵に囲まれた桜山村大山では、早くは17世紀後半から秣場をめぐる争論が確認される<sup>14)</sup>。まず寛文13年（1673）



第4図 下山口村絵図－嘉永5年（1852）－  
 （沼田米子家文書「下山口村々絵図」により作成）  
 注）原図では稲場が橙色で示されている。

には、上山口村百姓らが桜山村の御運上山を荒らした件につき、諸寺院や、近隣の名主による仲介によって、金6両で内済となっている<sup>15)</sup>。上山口村百姓らによる盗伐行為は、その後も絶えることがなく、安永5年（1776）にも、同様の事件を起こしている<sup>16)</sup>。そして文化14年（1817）には、上山口村百姓らは代金を支払って桜山村大山の下草を刈り取ることを許可されている。下草代は1年あたり金1分2朱で、同年より10年間の契約であった。

その後、慶応3年（1867）になると、老中水野忠精によりこの桜山村大山に牧場開設の「御差図」が下された。これについて、桜山村は江川代官所へ「御免」を嘆願する。その嘆願によれば、桜山村大山の百姓持山は、先々より秣場として「仕立置」いてきたという。桜山村・長柄村及び逗子村の「三ヶ村入会」であり、下草を刈取り、「田

畑仕付養」ならびに「自村牛馬之飼料」として利用してきた。長柄村と逗子村は「往古」より「相当之代永」を支払って桜山村大山の秣場を借り、桜山村は同所が「百姓持山」ながら「往古ヨリ上木等も植付」けてこなかったという。そして田畑の肥料として藻草を利用できる海岸付の村落とは異なり、山付の3ヶ村では、大山に牧場を開けば「田畑耕作ハ勿論、牛馬養方」についても手段が無いとして、牧場開設の免除を求めた<sup>17)</sup>。

#### b. 木古庭村と周辺村落

木古庭村に関しては、史料上では18世紀前半以降に、近隣の上山口村及び下平作村との間の争論が確認される。享保8年（1723）には、木古庭村と上山口村との秣場争論について、木古庭村の主張を記した史料が作成された<sup>18)</sup>。前中欠の案文ではあるが、注目すべきは次の2点である。

まず秣場の村境に関連して、「老人」が2回の検地で案内者を務めていることである。すなわち、上山口村と木古庭村の秣場の村境を巡って争論が起こったが、木古庭村の「老人」がいうには、「六十年以前」に「山御検地」が行われ、「大澤山三国峠」まで9町6反7畝14歩の秣場があるという。また「三十年程以前」にも「出入」があり、この「三国峠」を巡って双方の意見が相違した。そして「卯ノ年之御検地」でも「老人」が「御案内」をしているという。前者の検地は寛文5年(1665)に行われたものであろう。寛文5年の「山検分帳」<sup>19)</sup>をみると、老人の主張通り、「大澤山」に2筆合わせて9町6反7畝14歩の山が帳付けされている。この2筆は「惣持」となっており、木古庭村の共有秣場であったと判断されよう。また後者の卯年は元禄12年を指すと考えられる。同年の山検地帳の帳末には、3筆の「秣山」が記載されているが、「みね山」3町5反、「大澤谷」1町7反、「畠山」6町2反の合計6町4反となっている。いずれも「大澤山」ではなく、また面積も大幅に減じている。

2点目に注目すべきは、木古庭村と田浦村との関係である。木古庭村では「田浦村御百姓衆」に山を預け、「山銭」を請け取っているという。後述するように、幕末期には木古庭村の茅山は田浦村の住民に利用されており、このような利用のあり方は、18世紀前半まで遡ることが確認される。このほか明和3年(1766)には、木古庭村の南東に位置する下平作村の百姓が、木古庭村「峯山馬草場」を「猥りに蒔」った件につき、内済に及んでいる<sup>20)</sup>。

これらの事例から明らかな通り、三浦丘陵においては17世紀後半以降、秣場を巡る争論が頻発していた。桜山村が訴えたように、村々は草地から耕地の肥料や牛馬の飼料を得ており、草地が不足すれば農業経営が成り立たないほどに依存していた。そのため時には境界を越えて他村の領域で下草を刈ることもあり、村落間の争論が頻発していた。

### Ⅲ 明治期の山野利用

#### 1) 明治期の木古庭村

第5図は、明治20年代における木古庭村の土地利用を示したものである。南北約2.7キロメートル、東西約1.7キロメートルの村域の周囲は、東を平作村、西を上山口村、南西を秋谷村と芦名村、北を逸見村と田浦村に接している。明治期には、木古庭村は9つの小字(入、後山、広尾、大沢谷、大沢山、高祖坂、アラク、藪、大沢)に分かれていた。18世紀半ば以降、木古庭村の戸数は65戸前後であり、人数は350人前後で推移している<sup>21)</sup>。また高祖坂の本圓寺は、大明山と号する日蓮宗の寺院である。寺伝によれば、もと本圓寺は伊豆の僧が結んだ庵であり、布教のために房総半島から三浦半島に渡った日蓮が滞在したという<sup>22)</sup>。

第5図を一見して明らかな通り、村域の大部分は山林であり、村域中央を流れる下山川に沿って宅地や耕地が分布している。そして大沢谷・大沢・藪には村持の秣場が分布していた。分布範囲は丘陵山頂部付近にあたり、幕末期に描かれた下山口村絵図の描写と近似している。

山林面積の広さに次いで注目される点が、下山川左岸の藪及び大沢に広く分布する棚田である。下山川左岸は地すべり地形のため緩やかな斜面となっており、この緩斜面を利用して一帯に棚田が形成されていた。水田はこの他にも広尾や高祖坂及びアラクの沖積低地に分布していた。また、畑は、後山や広尾及び高祖坂やアラクの南向き斜面に、そして入では下山川の右岸を中心に分布していた。明治15年(1882)には、畑では大麦を中心として雑穀や甘藷及び木綿が作付されていた(第2表)。このほか林産物としては、明治10年(1877)に炭が12,840貫(535円)、薪が5,000束(25円)生産されていた。すなわち木古庭村では薪炭の生産額が米に次いでおり、収入源として重要な生産物であった。

第3表は、明治10~20年代における木古庭村の世帯別農業経営を示したものである。浦賀道に面した後山と広尾には、酒・醤油の小売商がおり、

第2表 木古庭村における農林産物－明治10・15年（1877・82）－

年代	作物	反別 (畝)	生産量	生産額 (円)
明治15 (1882)	米	2,090	314石	2132.82
	糯米	1,080	42石	294.00
	大麦	1,550	124石	225.68
	大豆	480	38石	192.00
	粟	650	52石	173.16
	甘藷	280	35,360斤	141.44
	裸麦	540	38石	94.50
	稗	753	75石	75.30
	小麦	330	21石	71.43
	実綿	63	330斤	33.00
明治10 (1877)	蕎麦	150	9石	29.97
	炭	－	12,840貫	535.00
	薪	－	5,000束	25.00

（葉山町役場文書「明治十五年相模国三浦郡  
木古庭村普通農産表控」）

木古庭・伊東家文書「地誌明細記」により作成）

注）生産量は小数点1位以下を四捨五入した。

このほか理髪業や菓子類などの小売商が営まれていた。また炭焼を営むものが2人いたが、薪や炭などの林産物は比較的に少ない。なお大正期には、広尾の18戸中17戸で、海軍工廠の職工として勤務する者がいたという<sup>23)</sup>。大沢と藪では薪や藁などの生産量が多く、また屋根葺と炭焼が各3人、木挽と桶作が各1人確認され、山林生産が盛んであったといえる。

小字ごとの特徴は、牛馬の所有頭数からもうかがえる。後山や広尾では馬が多く、街道沿いの物資輸送に利用されたものと推測される。一方で棚田が広く分布する大沢及び藪では牛の多さが目立つ。

## 2) 木古庭村入における茅の利用

木古庭村のなかでも、山林面積の割合が特に高い入には、「郷林」と呼ばれる共有茅場があった<sup>24)</sup>。この郷林は本圓寺の裏手に位置しており、約20戸の住民によって共同所有されていた。郷林の面積は6～7反ほどであり、第二次世界大戦後までは利用されていたとみられるが、現在は利用されていない。この郷林の茅は屋根葺のみに利用され、

正月10日頃より3日間ほどかけて茅刈りが行われていたという。

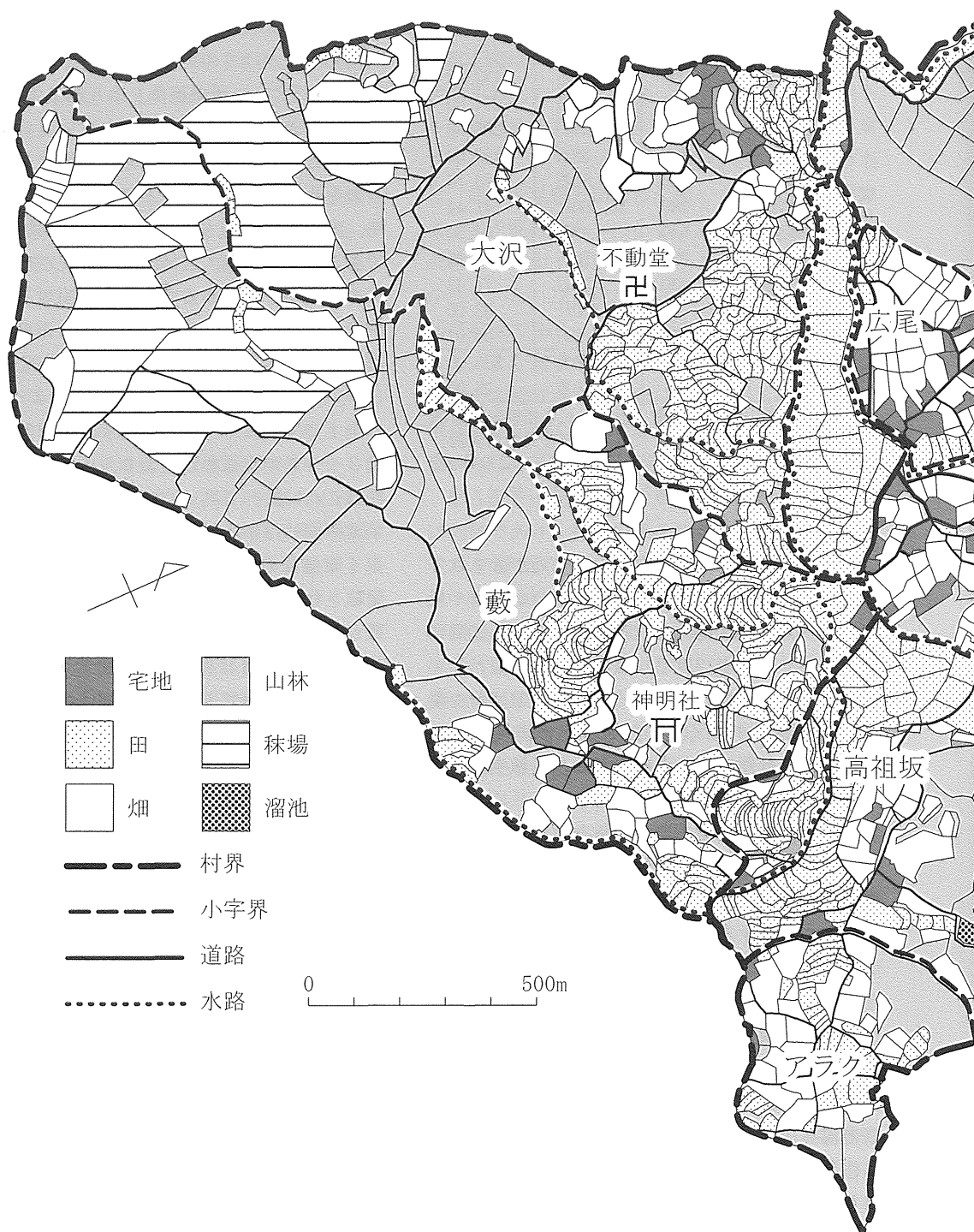
第4表は、入の共有文書をもとに、幕末期から明治初期にかけての茅山利用者を示したものである。本帳面には、「未正月」より28年間の干支と、1年につき1人の人名が記されている。記載された人名はのべ26人分であるが、このうち重複するものを除くと実質15人分となる<sup>25)</sup>。この15人のうち、唯一地名が冠せられるのが「田浦・半五郎」である。その他の人名は、入の住民が12人、高祖坂の住民が2人である<sup>26)</sup>。入や高祖坂といった木古庭村住民だけでなく、他村住民も入の郷林を利用している点は興味深い。田浦・半五郎は丑年（7年目）に1貫400文、7年後の申年（14年目）に金1分を支払っている。20年目の寅年以降では金2～3朱が支払われており、田浦・半五郎の金額はこれに比べて高い点が指摘できる。

本帳面には茅の用途は示されていないが、おそらく屋根葺のために使われたものと推察される。記載された26ヶ年のうち5ヶ年分に「正月」の記載があることは、前述したように、郷林の茅刈り作業が毎年正月に行われていたことと合致する。また、同一人物による利用間隔は約20年弱であったが、これは茅葺屋根の耐用年数に近似している。このことから本帳面に記載された内容の大半は、屋根葺のために共有の茅場を利用した記録であると判断される。

なお周辺村落でも、木古庭村と同様に共有茅場の茅を屋根葺に利用していた。例えば池上（現横須賀市）では正月15日過ぎから茅刈を行っていた。31戸で茅場を利用し、およそ30年の間隔で順番が廻ってきた<sup>27)</sup>。また上小矢部（現横須賀市）では、大正初期まで茅葺屋根の葺き替えのため無尽が行われていた<sup>28)</sup>。さらに根岸（現横須賀市）では、明治から大正期において、屋根葺きのための茅は1回の利用につき1万束ほど使用されていた<sup>29)</sup>。

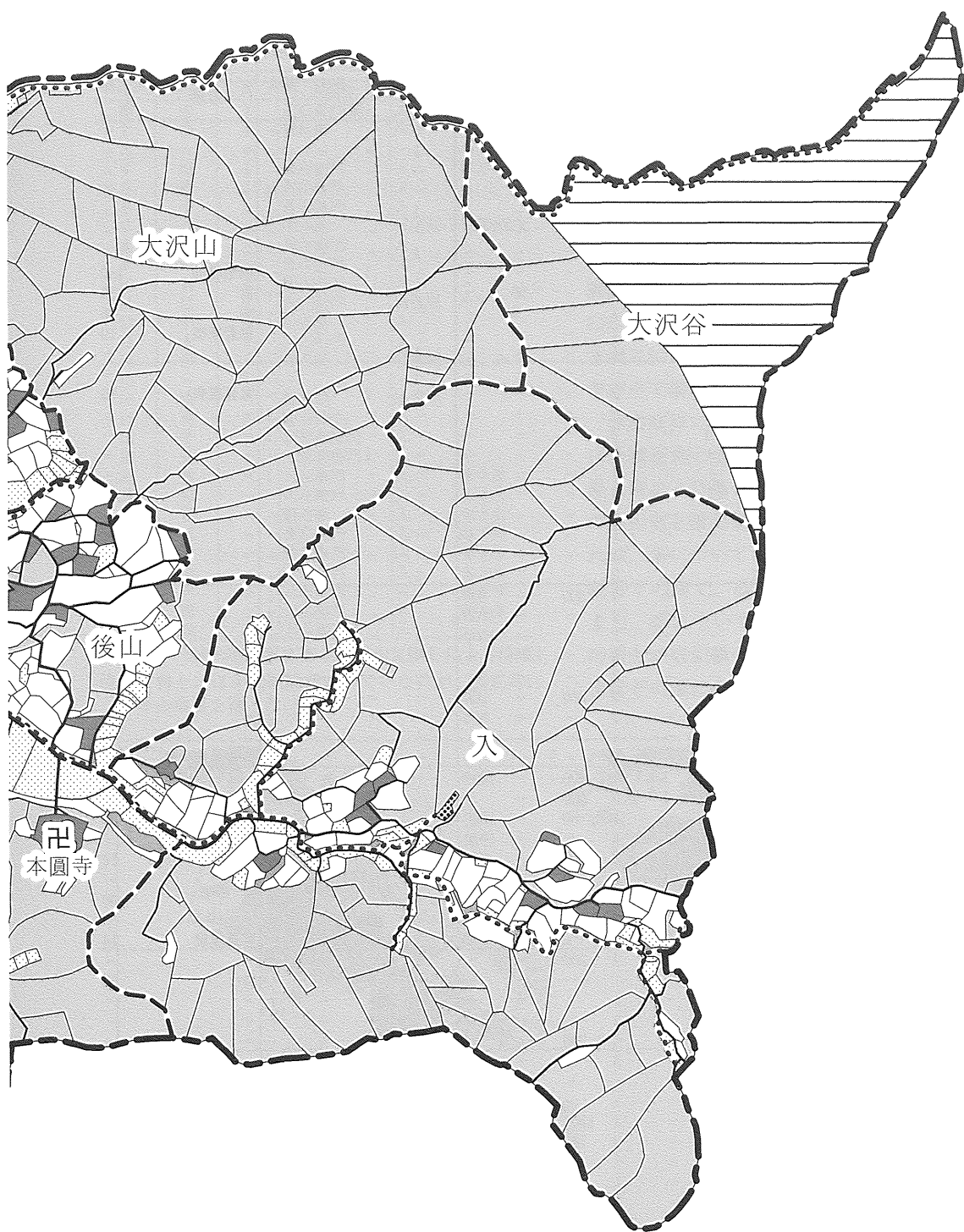
## 3) 都市部における林産物の需要

明治期の三浦半島における薪炭の生産は、北部の丘陵地で盛んに行われていたが、なかでも木古



第5図 木古庭村の土地利用－明治20年代－  
 (横浜地方法務局横須賀支局所蔵地籍図、葉山町役場文書「秣場書上」により作成)





第3表 木古庭地区における世帯別生産物－明治18～21年（1885～88）－

字	世帯	明治21年											明治18年				明治18年	
		米 (俵)	精米 (俵)	玄米 (俵)	大麦 (俵)	小麦 (俵)	裸麦 (俵)	稗 (俵)	味噌 (樽)	薪 (把)	炭 (俵)	藁 (把)	雄馬	雌馬	雄牛 (頭)	雌牛	業態	売上高 円
後山	1	1	-	-	3	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	2	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	3	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	4	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	5	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	7	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	酒類醬油	180
	9	-	-	-	2	-	-	-	1	-	50	-	1	-	-	-	炭	55
	10	-	-	-	2	-	-	-	1	-	5	-	-	1	-	-	炭	36
	11	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	草葺屋根	10
	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
広尾	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	2	-	-	-	4	1	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	草葺屋根	15
	3	-	1	-	-	1	3	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	4	-	3	-	-	1	3	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	6	-	1	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	7	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	8	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	10	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	11	-	2	-	8	2	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-
大沢	1	10	-	0.125	-	-	-	-	2	300	-	800	-	-	-	1	-	-
	2	2	-	0.125	-	-	-	-	2	-	-	1000	-	-	-	1	-	-
	3	2	-	0.15	-	-	-	-	2	-	-	1000	1	-	-	-	-	-
	4	2	-	0.15	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	5	2	-	0.2	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	6	2	-	0.15	-	-	-	-	2	800	-	200	-	-	-	1	-	-
	7	4	-	0.1	-	-	-	-	2	-	-	500	-	-	-	1	炭	25
	8	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	草葺屋根・碓	28
藪	1	-	0.125	4	4	0.05	-	1	1	400	-	1000	-	-	-	1	-	-
	2	-	0.025	1	2	-	-	1	0.5	500	-	-	-	1	-	-	-	-
	3	-	0.025	4	4	2	1	-	1	50	-	1000	-	-	-	1	木挽	20
	4	-	0.025	2	3	1	-	-	1	-	-	1000	-	-	-	1	-	-
	5	-	0.025	5	3	2	-	1	2	100	-	500	1	-	-	-	桶	14
	6	-	0.125	1	1	0.05	-	1	1	200	-	500	-	-	-	1	-	-
	7	-	0.025	1	2	1	-	1	2	-	50	1000	1	-	-	-	炭	30
	8	-	0.025	4	5	1	-	1	2	300	-	1000	-	-	-	1	-	-
	9	-	0.125	2	4	1	-	1	1	-	-	500	-	-	1	-	草葺屋根	14
高祖坂	1	-	-	6	12	6	4	-	4	200	-	-	-	-	-	2	-	-
	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	炭	55
	3	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	4	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5	-	-	3	-	2	1	-	4	200	-	-	-	-	-	-	-	-
入	1	-	-	2	5	1	-	-	3	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	3	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	4	-	-	4	5	1	2	-	3	1500	-	300	-	-	-	1	炭	40
	5	-	-	3	5	1	-	-	2	100	-	-	1	-	-	-	-	-
	6	-	-	1	5	-	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	7	-	-	-	5	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	8	-	-	3	-	2	1	-	2	200	-	-	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	1	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	10	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	11	-	-	2	5	-	-	-	1	100	-	-	1	-	-	-	-	-
	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	13	-	-	2	2	1	-	-	2	100	-	-	-	-	-	-	-	-

（葉山町役場文書「徴発ニ付雑穀蔵現在調」・「牛馬取調書」・「十八年二月調査」により作成）

第4表 木古庭村における「茅山」の利用－幕末～明治初期－

年	干支	月	利用者	居住地	備考
1	未	1	三右衛門	入	－
2	申	1	惣兵衛	入	－
3	－	－	－	入	－
4	戊	1	徳左衛門	入	半どり
5	亥	1	六左衛門	入	－
6	子	－	新右衛門	入	－
7	丑	－	半五郎	田浦村	1貫400文
8	寅	－	長左衛門	入	－
9	卯	－	吉左衛門	入	－
10	辰	1	勘右衛門	入	－
11	巳	－	久左衛門	高祖坂	かや
12	午	－	七兵衛	入	－
13	未	－	八左衛門	入	－
14	申	－	半五郎	田浦村	金1分
15	－	－	－	入	－
16	戌	－	勘五郎	高祖坂	－
17	亥	－	勘右衛門	入	－
18	子	－	四郎左衛門	入	－
19	丑	－	三郎右衛門	入	－
20	寅	－	六左衛門	入	金2朱
21	卯	－	久左衛門	入	金2朱
22	辰	－	惣兵衛	入	金3朱
23	巳	－	長左衛門	入	金3朱
24	午	－	新右衛門	入	金3朱
25	未	－	三右衛門	入	金3朱
26	申	－	八左衛門	入	金3朱
27	酉	－	吉左衛門	入	金3朱
28	戌	－	七兵衛	入	－

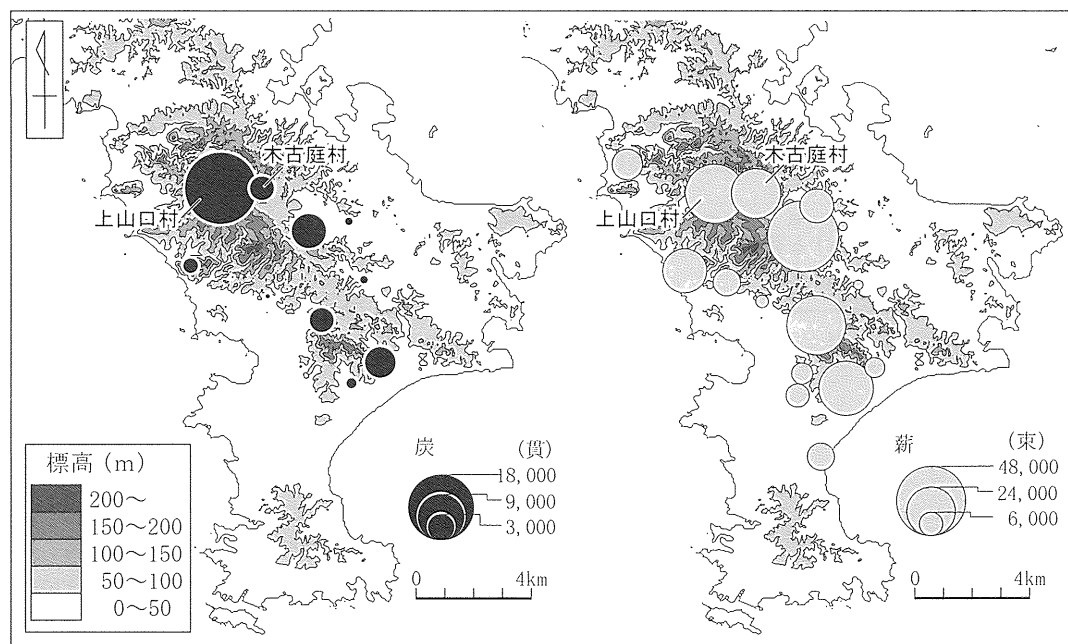
(鈴木増雄家文書「かや山覚帳」により作成)

注) 資料上には年代が記載されていないが、便宜的に年の項目を補った

庭村や上山口村では他村に比べて多くの薪炭が生産されていた(第6図)。そして木古庭村や周辺村落で生産された薪炭は、三浦半島東岸の逸見村(現横須賀市)へ津出されていた<sup>30)</sup>。なお逸見村や田浦村では、薪仲買商人の存在が指摘されている<sup>31)</sup>。このうち田浦村では、文化年間に江戸の薪問屋に薪を出荷していた薪商人が2人いた<sup>32)</sup>。

さらに幕末期から明治期にかけて、木古庭村に隣接する山中(現横須賀市)には、木古庭や上山口の炭を江戸へ出荷する薪炭商がいた<sup>33)</sup>。なお聞き取りによれば、木古庭村の薪などの林産物はリヤカーで横須賀まで運んで販売していた<sup>34)</sup>。

木古庭村に隣接する上山口村では、明治期における林産物の流通を具体的に知ることができる。第5表および第6表は、上山口村における茅と薪の取引先と販売額を示したものである。これによれば、茅については大津・坂本(現横須賀市)や鎌倉との間で、取引を行っていたことがわかる。また、薪については、上原(現葉山町一色地区)の甚七が取引額の大半を占めているが、注目すべきはその他にみえる取引先である。堀内(現葉山



第6図 三浦半島における薪炭生産量－明治15年(1882)－  
(『偵察録』により作成)

町)の他、汐入(現横須賀市)や、神奈川(現横浜市)などとも取引が行われていた。いずれも用途は不明であるが、上山口村の茅や薪が都市部の需要と結びついていた点は注目される。さらにこの他、同史料には取引先として深田・逸見・汐入・横須賀などの地名が散見される。上山口村の茅や薪などの林産物は、単に村内で農業的利用にあてられていただけでなく、堀内、横須賀や鎌倉、神奈川などといった都市部へ移出されていたことがわかる。

第5表 上山口村における茅の取引先－明治14～15年(1881～82)－

年	月	日	取引先	数量(把)	金額(銭)
明治14	7	13	－	26	46.0
明治14	7	24	－	21	35.0
明治14	7	27	上原	－	320.0
明治14	7	29	上原	－	680.0
明治14	8	7	塩入	25	44.8
明治14	9	4	神奈川	61	116.7
明治14	10	1	上原	－	350.0
明治14	12	14	上原	－	200.0
明治14	12	22	一色	220	461.5
明治14	12	31		80	
明治14	－	－	－	66	60.0
明治14	－	－	堀内	38	58.0
明治15	1	27	一色	165	300.0
明治15	1	28	上原	－	60.0

(三留武家文書「真木山記帳」により作成)

第6表 上山口村における薪の取引先－明治14～15年(1881～82)－

年	月	日	販売先	金額(銭)
明治14	12	－	大津	100
明治14	12	－	鎌倉	110
明治15	1	30	大津	300
明治15	2	－	坂元	100
明治15	3	12	鎌倉	100

(三留武家文書「真木山記帳」により作成)

#### Ⅳ 明治期の植林

##### 1) 明治20年代の木古庭地区入におけるマツ・スギの植林

明治後期には、日清戦争や日露戦争の記念植林が日本各地で行われたが、対象地域においても植林が行われた。第7表および第8表は、明治20年代の木古庭地区入における植林作業と苗木の購入先について示したものである。

まず第7表から植林作業の様子を確認すると、明治26年(1893)に植林が実施されたのは、大沢谷及び大沢山である。3月31日と4月4日に「山刈」があり、同月5日と8日にかけて大沢谷でマツの植付が行われた。そして10月15日及び16日の両日には、大沢山に1,200本のマツが植付けられている。さらに明治27年(1894)4月21日から26日にかけてマツ及びスギが、明治30年(1897)4月30日には「大影の三角山」にスギが植付けられている。植林の目的は定かではないが、明治26・27年は、日清戦争記念植林が広く行われた時期と

第7表 木古庭地区における植林作業－明治26～30年(1893～97)－

年	月	日	作業内容	場所	人数(人)	備考
明治26	3	31	山刈	大沢谷267	14	
明治26	4	4	山刈	大沢谷267	14	
明治26	4	5	植付	大沢谷267	14	マツ
明治26	4	8	植付	大沢谷267	14	マツ
明治26	8	27	下草刈	大沢谷267	15	
明治26	10	15	植付	大沢山2	15	マツ1200本
明治26	10	16	植付	大沢山2	15	マツ
明治26	10	19	下草刈	大沢谷267	11	
明治26	10	19	下草刈	大日影	4	
明治27	3	27	山刈	－	15	
明治27	3	28	山刈	－	15	
明治27	3	29	－	－	15	
明治27	4	21	植付	－	15	マツ
明治27	4	23	植付	－	15	マツ・スギ
明治27	4	26	植付	－	15	マツ・スギ
明治30	4	30	植付	大影の三角山	15	スギ1000本

(伊東秀男家文書「松苗植付人夫共地記帳」  
「大澤山松杉苗記」により作成)

重なる。

続いて第8表で注目される点は、苗木の購入先である。明治26年と27年には、富士見村原宿（現横浜市戸塚区）から購入されている。そして明治30年に植林された苗木は、近隣の田浦村大作（現横須賀市）および三浦半島南部の初声村高円坊（現三浦市初声町）から購入されたものであった。これらの購入記録から、明治30年頃には、三浦半島に複数の苗木生産地が形成されていたことがわかる。

三浦郡における苗木生産額は、明治30年代後半から大正初めにかけて、『神奈川県統計書』にあらわれている（第9表）。三浦郡の苗木生産額は、木林や木炭に次いでいる。明治30年代後半から漸次増加し、大正元年（1912）の1,650円をピークとして、一定量が生産されていた。

なお、明治36年（1903）3月25日、三浦郡農会は埼玉県安行村（現埼玉県川口市）で苗木育成の状況を視察している<sup>35)</sup>。この時期、三浦郡農会を中心として、三浦郡下で苗木生産に注目が寄せられ

第8表 木古庭地区における苗木の購入先－明治26～30年（1893～97）－

年	月	日	本数 (本)	樹種	購入先	代金 (円)	備考
明治26	4	4	3,600	マツ	富士見村原宿	1,258	大沢谷267
明治26	4	7	4,850	マツ	－	3,343	大沢谷267
明治27	－	－	3,000	マツ	－	2,230	イ号
明治27	－	－	3,800	マツ	－	3,610	
明治27	－	－	2,600	スギ	－	5,700	
明治27	－	－	－	スギ	富士見村原宿	－	
明治27	－	－	－	スギ	富士見村原宿	－	
明治27	－	－	－	マツ	富士見村原宿	－	
明治29	4	－	1,750	マツ・マサキ	－	5,250	
明治29	4	－	－	マツ・スギ	－	13,541	
明治29	4	－	400	スギ	－	1,366	
明治29	4	－	1,600	スギ	－	5,300	大日影の口の右の山
明治30	4	30	200	マツ	} 初声村高円坊 }	3,000	イ号
明治30	4	30	300	マサキ			イ号
明治30	4	30	200	マツ			貳号
明治30	4	30	300	マサキ	田浦村大作	3,000	貳号
明治30	4	30	1,000	スギ			大影の三角山

（伊東秀男家文書「松苗植付人夫共地記帳」、「大澤山松杉苗記」により作成）

第9表 三浦郡における林産物の生産量－明治38～大正3年（1905～1914）－

（単位：円）

年代	丸・角材	挽材	竹材	杉皮	苗木	木炭	下草	その他	合計
明治38	2,222	180	1,768	351	－	3,444	260	778	30,875
明治39	4,855	110	1,818	353	750	2,364	260	44	40,880
明治40	9,592	380	2,114	225	900	2,200	400	60	56,866
明治41	5,570	581	1,846	875	209	3,953	900	19	63,953
明治42	7,880	1,518	2,406	825	75	6,065	930	153	62,749
明治43	5,840	2,050	1,417	828	1,026	5,816	－	166	57,193
明治44	8,501	1,445	3,035	858	1,525	7,032	5	320	72,521
大正1	10,813	1,992	3,486	850	1,650	7,178	－	305	68,974
大正2	8,730	2,062	3,513	820	1,400	4,800	－	292	65,457
大正3	11,435	2,595	4,066	826	1,150	4,523	－	615	77,910

（各年次の『神奈川県統計書』により作成）

ていたと判断される。ただし、三浦郡における苗木生産は、その後、大きな発展をみなかったようである。昭和4年（1929）には神奈川県山林会により第1回苗圃品評会が開催されたが、三浦郡からは出品されなかった<sup>36)</sup>。

## 2) 三浦郡におけるクスノキの植林

日清戦争を契機とする植林に関して、三浦郡下ではスギ・マツ植林以外の動向もあった。明治27年から28年（1895）にかけて、日清戦争を記念して、各郡小学校及び神社等へクスノキの苗木が配布されたが、クスノキの栽培は普及しなかった<sup>37)</sup>。三浦郡内では、明治28年1月から3月にかけて、尋常小学校5校（中西浦・逸見・浦郷・船越・武山の各校）にクスノキの種子が配布されている<sup>38)</sup>。

さらに明治38年（1905）には、三浦郡農会がクスノキの栽植を奨励した<sup>39)</sup>。クスノキの苗木を静岡県田方郡（1万2千本）、鎌倉郡（4千本）から購入し、購入した苗木は郡内各町村農会及び篤農家に配布されたという。これは「日露戦争交戦記念」として実施されたものであるが、そのみならず、樟脳生産も目的とされていたとみられる。同年8月17・18日には、農事奨励事業として採脳試験を行うために、神奈川県から技手の派遣を求め、採脳方法を見学するとともに、講話会が開かれている。そしてその結果、「採脳ノ前途有望」であると確認されたことが会務報告書に記載されている。その上、明治42年（1909）11月6日には、三浦郡農会は神奈川県小田原町で樟脳製造の状況を視察している<sup>40)</sup>。

こうした動向の背景には、神奈川県の実策があった。明治40年（1907）、神奈川県はケヤキ・クスノキ・ウルシを「特種樹類」として位置づけ、種子下付規則を設けている。県下では、木材を原料とする製品が近年増加傾向にあるとして、「海外輸出品として多量なる樟脳の原料」であるクスノキを筆頭に、「軍用の什器又は戦艦、車両其の他各種工業用」のケヤキ、「工芸品たる漆器の塗料に要する」ためのウルシの3種を県の主要な奨励樹種としたものであった<sup>41)</sup>。

なかでもクスノキに関する注目は高く、明治44年（1911）の『神奈川県産業要覧』には、以下の通り記されている<sup>42)</sup>。

楠は本邦の特産樹にして其目的用材、将た樟脳製造用たるを問はず、本県の沿岸地方の気候と地勢は寧ろ楠の郷土と称するを得へし

クスノキは神奈川県「特産樹」であり、神奈川県沿岸地方は「楠の郷土」と称することができるという。このように高い評価を受けていたクスノキは、沿海地方の気候温暖な土地を選び、三浦郡葉山村および、足柄下郡真鶴村・岩村・吉浜村で植栽され、その成績は良好であった<sup>43)</sup>。

## V おわりに

本稿では、三浦丘陵を首都圏の重要な緑地として位置づけ、都市との関係を考慮しながら、近世前期以降における山野利用の変遷について基礎的な検討を試みた。本稿の内容をまとめると、以下の通りである。

まず、元禄期の三浦丘陵には広く草地在り分布していたことが明らかになった。草地は田畑の肥料や牛馬飼料として利用され、17世紀以降、村落間では秣場を巡る争論が頻発していた。また幕末期の村絵図には、三浦丘陵の山頂部を中心に広く草地在り広がっている様子が描かれていた。そして明治10年代の本古庭村では、特に大沢・藪・高祖坂・入で、山林資源の利用が活発であった。また上山口村では都市部へ茅や薪を盛んに移出していた。その後明治20年代には、本古庭村入でマツやスギなどの植林が行われていたが、これらの苗木は三浦半島周辺の苗木生産地から購入したものであった。さらに明治30年代後半以降には、神奈川県下でクスノキへの関心が高まり、三浦郡では農会主導によるクスノキの植林が行われていた。現在、三浦丘陵に広く分布するコナラなどの二次林は、薪炭林が放棄されたものであるが、このほかに上述のような植林が行われた結果、現在の植生

が形成されたといえる。

明治後期に三浦郡下で展開した植林は、日清・日露両戦争を契機とするものであり、こうした記念植林は全国的に実施されたものである。しかしながら三浦郡ではこれらの植林をきっかけとして、苗木産地が形成されたり、クスノキへの注目が高まったりするなどの動向がうまれた。なお明治23年(1890)には横浜で横浜植木商社が設立され、ユリや菖蒲などの植物貿易を発展させていた<sup>44)</sup>。三浦郡における苗木生産は海外輸出とも関連していた可能性がある。またクスノキへの関心は、輸出入の樟脳生産を目的とするものであった。このように、明治後期の三浦郡下では山野利用に新しい展開が見出されていたといえる。

クスノキがどのように植林され、どのように利用されたのかについては、具体的に検討する必要があるだろう。また、三浦郡における苗木産地の実態は、より詳細に明らかにする必要があるだろう。従来の研究では、安行などの大規模産地については研究がなされているが、小規模産地に関しては言及がない<sup>45)</sup>。これらは今後の課題としたい。

## 付 記

本稿の作成にあたり、葉山郷土史研究会古文書部会の皆様には収集資料利用のご便宜をはじめ、多くのご教示を賜りました。あわせて、木古庭地区の稲葉栄一氏・鹿島忠夫氏・小崎龍延氏・鈴木増雄氏の皆様から多くのご教示を賜りました。また資料所蔵者の伊東秀男氏・鈴木増雄氏・沼田米子氏・萩尾藤江氏・葉山政夫氏・三留 武氏と、葉山町役場の皆様には、資料利用に際してご高配を賜りました。そして神奈川県立公文書館の皆様には、資料閲覧に際してご高配を賜りました。以上記して厚く御礼申し上げます。

## 注および参考文献

- 1) 主な成果として、以下が挙げられる。①立石友男(1972):『関東平野における平地林の分布とその利用ー農業的土地利用から都市的土地利用へー』, 地理誌叢, 13, 10~26。②立石友男(1975):『関東平野における林地とその開発』, 沢田 清編『日本大学地理学科50周年記念論文集ー関東とその周辺ー』, 日本大学地理学科, 15~34。③犬井 正(1992):『関東平野の平地林』, 古今書院。
- 2) 安池尋幸(1994):『日本近世の地域社会と海域』, 巖南堂書店, 3~35, 69~92。
- 3) 山田麻子・原田 洋・奥田重俊(1997):『三浦半島南部における明治期の植生図化と植生の変遷について』, 生態環境研究, 4-1, 33~40。
- 4) 千葉徳爾(1991):『増補改訂はげ山の研究』, そしえて。
- 5) 小林 茂・宗 建郎(2009):『環境史からみた日本の森林ー森林言説を検証するー』, 池谷和信編『地球環境史からの問いーヒトと自然の共生とは何かー』, 岩波書店, 154~173。
- 6) 葉山郷土史研究会では平成16年(2004)以来、成果を『郷土誌葉山』として刊行している。
- 7) 逗子市編・発行(1997):『逗子市史 通史編 古代・中世・近世・近現代編』, 184ページ。
- 8) このほか、元禄年間の山検地帳は、武蔵国橘樹郡などの天領でも作成されている。
- 9) 葉山町役場文書「相模国御浦郡長柄村荻山芝山山秣場御検地帳」。
- 10) 地名の比定にあたっては、以下を参照した。鶴 泰(2007):『長柄の古い地名』, 郷土誌葉山, 4, 8~11。
- 11) 滝本誠一(2010):『「三崎道」と下山口商店街』, 郷土誌葉山, 7, 58~62。
- 12) 沼田米子家文書「下山口村々絵図」(神奈川県立公文書館寄託)。なお下山口村の絵図に関しては、以下に詳しい。鳥居信吉(2010):『絵図が語る下山川下流の物語』, 郷土誌葉山, 7, 43~46。
- 13) 横須賀市編・発行(2011):『新横須賀市史 資料編 古代・中世補遺』, 555ページ。
- 14) ①前掲7), 205~212。②黒田康子(2009):『桜山「大山」と上山口村』, 郷土誌葉山, 6, 34~37。
- 15) 桜山・石渡家文書「桜山村持運上山荒らし内済手形」(逗子市編・発行(1985):『逗子市史 資料編 I 古代・中世・近世 I』, 474~475)。
- 16) 桜山・石渡家文書「上山口村百姓桜山村大山の山荒らしにつき内済手形」(逗子市編・発行(1988):『逗子市史 資料編 II 近世 II』, 50~51)。
- 17) なおこの嘆願は聞き入れられず、慶応4年(1868)には牧場開設の請願が提出された。桜山・石渡家文書「訴訟及書上記」(前掲16), 709~711)。
- 18) 木古庭・伊東家文書「口上之覚」(神奈川県立公文書館寄託)。
- 19) 木古庭・伊東家文書「山検分帳」(神奈川県立公文書館寄託)。
- 20) 木古庭・伊東家文書「一札之事」(神奈川県立公文書館寄託)。

- 21) 青山孝慈・青山京子編 (2001) : 『相模国村明細帳集成』, 岩田書院。
- 22) 本圓寺ご住職・小崎龍延氏のご教示による。
- 23) 葉山郷土史研究会編 (2008) : 郷土誌葉山, 5, 7 ページ。
- 24) 鈴木増雄氏のご教示による。
- 25) 28年間のうち酉年は2ヶ年分(3年目と15年目)の記載がなく、都合26ヶ年分で、人名はのべ26名分となる。なお、表紙に記された「嘉永2年」は酉年にあたる。帳面は末年から書き起こされているが、記載のない3年目の酉年を嘉永2年(1849)とすると、帳末28年目の戌年は明治7年(1874)にあたると、本帳面は幕末期から明治初年にわたる記録とみてよいであろう。このうち11名が2回、4名が1回分のみ記載されており、重複するものの出現間隔は、最長で23年(三右衛門)、最短で7年(田浦半五郎及び勘右衛門)であり、15～19年のものが多い。
- 26) 居住地の比定については以下を参照した。今井俊夫(2008) : 本古庭の屋号と家紋, 郷土誌葉山, 5, 13～16。
- 27) 横須賀市衣笠公民館編・発行(1976) : 『衣笠地区古老のはなし』, 78～79。
- 28) 前掲27), 147ページ。
- 29) 横須賀市市長室広報課編(1982) : 『古老が語るふるさとの歴史3』, 横須賀市, 174～175。
- 30) 前掲2), 26ページ。
- 31) 前掲2), 29ページ。
- 32) 西川武臣(1993) : 『江戸内湾の湊と流通』, 岩田書院, 133～135ページ。
- 33) 石井 昭(1987) : 『ふるさと横須賀 上』, 神奈川新聞社, 186～187。
- 34) 鹿島忠夫氏のご教示による。
- 35) 白井竜太郎家文書「三浦郡農会農会農事視察員名簿」(横須賀市編・発行(2009) : 『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅱ』, 341～347)。
- 36) 神奈川県山林会(1929) : 神奈川県山林会報, 5, 47～50。なお昭和5年(1930)に開催された第2回苗圃品評会でも、三浦郡からの出品はなかった。神奈川県山林会(1930) : 神奈川県山林会報, 7, 45～48。
- 37) 神奈川県内務部編・発行(1915) : 『神奈川県林業要覧』, 94ページ。
- 38) 横須賀市教育研究所編・発行(1992) : 『横須賀市教育史 年表編』, 40ページ。
- 39) 白井竜太郎家文書「三浦郡農会明治三八年度会務報告書」(横須賀市編・発行(2009) : 『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅰ』, 316～321)。
- 40) 前掲35)。
- 41) 神奈川県編・発行(1913) : 『神奈川県誌』, 480ページ。
- 42) 神奈川県内務部編(1911) : 『神奈川県産業要覧』, 神奈川県, 95～96。
- 43) 前掲41)。
- 44) ①横浜植木株式会社編(1993) : 『横浜植木株式会社百年史』, 横浜植木。②横浜開港資料館編・発行(2008) : 『港町 百花繚乱－横浜から広がる「緑化」文化－』。
- 45) 植木産地に関する研究として、以下がある。緑化研究会(1984) : 『日本の植木生産地域』, 古今書院。